

### アデレード大学アジア研究学部の歩み

米山 尚子

#### 1. オーストラリアにおける日本研究・日本語教育の位置づけ

オーストラリアは、日本研究・日本語学習への関心が特に高い国の一つである。オーストラリアの日本研究の始まりは古く、1917年、イギリス出身の日本研究者であったジェームス・マードックがシドニー大学で陸軍士官用の日本語講座を設立した時に遡るとされる。その後、第二次世界大戦で日豪は「敵国」同士となり、軍事的な実用日本語の他はあまり重視されない時代が続いた。戦後、1957年に通商協定が結ばれ、日本の経済成長とともに貿易相手国としてのプレゼンスが増してくると、日本および日本語教育は徐々に注目を集めていく。1960年には、いち早くオーストラリア国立大学に「アジア研究学部」が設立され、日本学科が立ち上がる。国家政策としても、60年代から、それまでの「白豪主義」を退けて多文化主義が奨励され、地理的に近接し、経済発展の可能性に満ちたアジアに着目するようになっていく。

この流れは言語教育にも及んだ。まず、1987年に初等・中等教育レベルから多言語の学習機会を開く「ロート」(LOTE: Language Other Than English) が採択され、さらに1994年には「ナルサス」(NALSAS: National Asia Languages/Studies Strategy for Australian Schools) が始まった。日本語は、LOTE・NASLAS ともに対象言語の一つとなっており、学習機会の増大とともに学習者も増加していった。80年代以降は日本の経済力の追い風を受け、大学でも積極的に日本研究・日本語学習プログラムが整備されていった。日本が経済的退潮を迎える90年代後半以降は、国内の中等教育で日本語を履修し、大学で日本語上級レベルに達する学習者数は減少する一方、アジアからの留学生の急増を反映して、オーストラリアにおけるアジア系日本語学習者数は増加した。この間、日本語教育は幾重にもグローバル化してきたと言える。

## 2. アデレード大学アジア研究学部の日本研究の歴史

アデレード大学のアジア研究学部 (Department of Asian Studies) は、40 年におよぶ歴史を持ち、オーストラリアにおける日本研究・日本語研究の発展に独自の視点から寄与してきた。アデレード大学は、海を挟んで南極に向き合う南オーストラリア州の州都に位置し、オーストラリアを代表する 8 つの研究大学「グループ・オブ・エイト」の一員である。オーストラリアでは 3 番目に古く、学生総数約 25,000 人 (留学生約 5,500 人を含む)、教員数約 2,000 人を抱える。世界の大学ランキングでは常に上位 1% に入り、ノーベル賞受賞者を 5 人輩出したことを誇りとする<sup>1</sup>。

2015 年現在、当アジア研究学部における教授体制は、日本研究者 1.5 名・日本語専任講師 2.5 名を含む日本・中国合わせて 8 名枠の専任講師と、その他数名の非常勤講師に支えられている。関連科目としては、社会科学・地域研究科目である「日本社会・文化入門」「現代日本政治論」「現代日本の文化とアイデンティティー」「日本の外交」「アジア経済と環境危機」等に加え、初級から上級までの日本語科目を提供している。2015 年における履修者数は、日本語科目では延べ約 750 名、日本研究を含むアジア関連の社会科学・地域研究科目では約 650 名だった。これに加え、オナーズ (Honours) と呼ばれる 4 年生の特別研究課程に在籍する 2 名、大学院の博士課程の 3 名が日本研究に取り組んでいる。2015 年に教養学部全体の再編でアジア研究学部と改名したが、それ以前の公式名称はアジア研究センター (Centre for Asian Studies) であった。

アジア研究センターは、1975 年、政治・経済的な重要性を増しつつあったアジア地域へのいっそうの理解の必要性を背景にスタートした。開設当初の規模は、日本研究と中国研究を合わせても、専任教員はわずか 4 名、学生は 104 名であり、日本語に履修登録した学生は 11 名だった。その後、政策的な追い風の中、スタッフ・学生ともに急速に数を増やしていき、80 年代からは大学院教育にも着手する。1987 年には日本研究の教授ポストが置かれ、Gavan McCormack 氏 (歴史学・現オーストラリア国立大学名誉教授) が、日本研究の最初のチェアとして就任した。専任教員数は、1993、94 年がピークの 19 名

1 John Robin Warren (2005 年ノーベル生理学・医学賞)、John M Coetzee (2003 年ノーベル文学賞)、Howard Walter Florey (1945 年ノーベル生理学・医学賞)、William Lawrence Bragg、William Henry Bragg (1915 年ノーベル物理学賞)。

であり、うち日本語講師は9名と約半数を占めた。日本経済を背景とした一時の「ブーム」が去った2000年代以降、専任教員数は減ったものの、アニメや若者文化・伝統文化等の日本のソフト面への人気を背景として、日本研究や日本語を履修する学生の数は安定している。

当学部の特徴は、「社会科学的研究と言語教育の二本柱」というものである。これは単に「地域研究をしながら言語も学ぶ」というものではなく、適切な言語理解と運用に根ざしてこそ、その社会をより深く探求することができ、また文化や言語も同様に、社会科学的な知識との関連においてこそ真に身につく、という両者の有機的な関連性を重視している。この「二本柱」は、開設当初から今日まで、当研究所の中心的な理念であり続けており、多方面で活躍する優秀な学生を生み出してきた。

また、アデレード大学のアジア研究学部は、数々のアジア研究関連の学会を主催してきた。2005年には豪州日本研究（Japanese Studies Association of Australia）学会、2010年には豪州アジア研究（Asian Studies Association of Australia）学会を開催した。さらに2015年には、同じくアデレードにある南オーストラリア大学とフリンドラーズ大学と提携し、南オーストラリア政府・国際交流基金アジアセンターの支援も得て、ICAS 9（9th International Convention of Asia Scholars）をアデレードで開催し、世界中から1,000名に及ぶ研究者が参加した。

### 3. アデレード大学における日本研究者

アジア研究学部の日本研究をリードするのは、Purnendra Jain氏（教授、国際関係学、日本政治）である。オーストラリアにおけるアジア研究・日本研究の第一人者であり、1990年代前半にJapanese Studies Association of Australia（JSAA 豪州日本研究学会）の学術雑誌 *Japanese Studies* の編集に携わり、それまでニューズレターであったこの学会誌を世界屈指の日本研究の学術雑誌として立ち上げた功績は特に大きい。その後、JSAA 会長（2003–2005）、Asian Studies Association of Australia（ASAA 豪州アジア研究学会）会長（2011–2012）などを歴任した。ICAS 9では、Convenorを務めた当学部の学部長である Gerry Groot氏（上席講師、中国研究）と共に Co-convenorを務めた。Jain氏は日本を含むアジア太平洋地域の政治・国際関係分野で国際的に著名な研究

者であり、数多い著作の中には『現代の日本政治—カラオケ民主主義から歌舞伎民主主義へ』（原書房、2013年）、『日本の自治体外交—日本外交と中央地方関係へのインパクト』（敬文堂、2009年）など和訳された著書もある。氏の主著は *Japan's Subnational Governments in International Affairs* (Routledge, 2005; paperback edition in 2012) である。その他にも、猪口孝氏との共編書 *Japanese Foreign Policy Today* (Palgrave MacMillan, 2000) 等がある。教授歴も多岐にわたり、東京大学社会科学研究所・政策研究大学院大学・ハーバード大学ライシャワー日本研究所・オックスフォード大学日産現代日本研究所等で、客員教授または客員研究員を務めた。

アデレード大学における日本研究について考える時、本学で2012年から2014年まで副学長を務めた Kent Anderson 氏（教授、日本を中心とする国際比較法、現西オーストラリア大学副学長）の存在は大きい。Jain 氏同様、オーストラリアにおけるアジア研究・日本研究をリードする研究者であり、豪州日本研究学会会長（2007–2008）、豪州アジア研究学会副会長（2013–2014）などを歴任した。さらに、副学長としてアデレード大学と日本の大学との交流を促進し、東京大学、名古屋大学、大阪大学、岡山大学、鳥取大学、立命館大学、中央大学、関西外大、上智大学、関西学院大学等、数多くの日本の大学との関係を深めた。留学体験の推進を目指すオーストラリア政府のニュー・コロomboプラン（New Colombo Plan）の連邦政府レベルでの政策決定への貢献も大きい。また、任期中には数多くの日本関連の講演やセミナーを主導し、日本研究の奨励に寄与した。

本学部のもう一人の日本研究者として、筆者、米山尚子（上席講師、社会学博士）の取り組みにも触れておこう。筆者は現在、「社会科学研究と言語教育の二本柱」という理念に基づき、日本を事例に社会科学の課題を取り上げる「アジア経済と環境危機：持続可能な社会の模索」等の科目と、日本語科目の両方を担当している。専門は教育社会学で、主著は *The Japanese High School: Silence and Resistance* (Routledge, 1999; paperback 2007; kindle 2012) である。さらに、日本研究を土台として西洋発の社会科学の認識論の根幹を問う知識社会学的研究に従事し、その成果である“Life-World: Beyond Fukushima and Minamata”（いのちの世界：フクシマとミナマタを越えて）、*The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, vol. 10, issue 42 (*Asian Perspective*, vol. 37, no. 4 に再掲

載)が評価され、2014年にはオーストラリア国立大学 Japan Institute 主催の日本研究の旗艦学会 Japan Update で11名の発表者の一人として招待された。現在は、アニミズムを日本の近代化と市民運動との関わりから社会学的に捉え直すプロジェクトに取り組んでいる。学会関連では、Japanese Studies の社会科学担当編集者を10年間務めた(2002-2012)。ASAA 豪州アジア研究学会の日本および北東アジア担当理事(2015-2016)でもある。教育面では、オーストラリアの学生が日本の地方およびエネルギー問題に触れる機会を持てるよう、2013年に鳥取大学への短期研修プログラム Gateway Japan Study Tour を立ち上げた。さらにコミュニティ・レベルでの日豪交流促進にも力を入れており、2012年にはメルボルン日本総領事館と提携して、アデレード大学図書館で福島の子供たちによる絵画・東北復興写真展を企画・実行した。

これらの社会科学系の日本研究者の他に、当学部の広い意味での日本研究は、2名の日本語専任講師、榎本佳世子氏(上席講師、言語学)と富田明子氏(講師、語学教育)、さらに最近定年退職した2名の講師、青木尚美氏(語学教育)と Sejin Pak 氏(社会学博士)によって長年支えられてきた。榎本氏と富田氏は二人ともオーストラリア政府の最優秀教育賞の受賞者であり、日本語の教授陣はこの20年ほどの間に、この他にもいくつもの教育賞を受賞してきた。人員削減による合理化や、中国経済の興隆に伴うプレッシャー等、様々な圧力がある中で、アデレード大学における日本語学習者数が長期にわたり、かなりの数で一定に保たれているのは、例外的に質の高い教育が一つの大きな要因であると考えられる。

また、ここでは日本研究に焦点を絞って当学部の紹介を行ったが、アデレード大学における日本研究はその開設以来40年間、常に中国研究と二本立てで、アジア研究センター(学部)として機能してきたという点を強調したい。日本と中国の政治・経済的立場の変化を反映して、日本研究と中国研究の位置づけは、学内でも、南オーストラリア州内でも、オーストラリア国内でも双方向に変化してきた。しかしながら、当学部における日本研究者の同僚は常に中国研究者であり、日常耳にする言葉は英語と日本語と中国語である。そのことが当学部の研究者が政治・経済・社会・国際関係等の理解において、常に複眼的、相対的視座を持ってきたことの基盤となっていると言えよう。

#### 4. 結語

総じて、アデレード大学の日本研究は、「日本ブーム・アジアブーム」にうまく乗りながら、その後も独自の理念で地道な発展を遂げてきたと言える。日本はかつての急速な経済成長とその後の繁栄による世界的な注目度こそ薄れたものの、成熟した先進諸国の一員としてその存在感は大きい。日本国内で理解されている以上に、海外、特に中国をはじめとするアジア諸国の若者の間で、日本語と日本文化の人気は非常に広範で根深い。グローバル化の進行とリスクの増大により、先進諸国が見通しの悪い混沌の中に沈んでいる現在、西欧諸国とは異なる仕方で近代化を遂げた社会として、日本社会が新たな道を切り開くための素材を提供する可能性と必要性は、むしろ増していると言える。今後は、地理的に限定された地域研究としての日本研究にとどまらず、日本というフィールドを通じて見出された知を世界へ発信していくことが、よりいっそう求められる。

#### 参考文献

Gerry Groot. "The History of the Centre for Asian Studies at the University of Adelaide." In *A History of the Faculty of Arts in the University of Adelaide 1876–2012*, ed. N. Harvey, J. Fornasiero, G. McCarthy, C. Macintyre and C. Crossin. University of Adelaide Press, 2012. <http://www.adelaide.edu.au/press/titles/faculty-arts/>